ジントニックを片手に

KEIKO MIYAZAWA-LAFLEUR

サンケイ出版

ジントニックを片手に

昭和56年10月15日第1刷

定価　九八〇円

著者　宮沢啓子

発行者　清水大三郎

発行所　株式会社サンケイ出版

東京都千代田区大手町一の七の二（〒100）
TEL（東京）三三一―七一一一（代）
大阪市北区梅田二の四の九（〒530）
TEL（大阪）三四三―一二二一（代）

印刷　サンケイ総合印刷
製本　誠幸堂

万一、乱丁落丁の場合はお取替えいたします

©宮沢啓子　1981 Printed in Japan 0030-811887-2756〈検印省略〉

ジントニックを片手に

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

私、宮沢啓子、当年三十四歳。さそり座生まれの独身女性。本人は結構いい女のつもりだが、十年前なら、オールド・ミスかと行かず後家と哀れまれ、五年前なら人生を肩肘張って生きているハイ・ミスと敬遠されただろう。それが今や、マスコミ様々のおかげで翔んでる女、キャリア・ウーマンとか。キャリア・ウーマンっていったってピンからキリまでいろいろ。デンマーク大使の高橋展子女史、高島屋広報部長の石原一子女史など本格派から、果ては、女性のための就職情報誌なるものを眺めつつ、ため息をついている人まで。

私はせいぜい、その間の中の中。真面目人間ながらも、怠け者。カッコいい人生、キャリアに憧れつつも、低血圧を言い訳に、無理をするのはやめましょう。つっぱっている女は可愛くない——。努力をもう一歩怠って生きてきた、誰かさんの科白じゃあないけれど〝普通の女の子〟である。その私がいったいなんだって、本を、それも自分の就職体験記を書くはめになったのか。一言でいえば、そういう普通の人の話が話になるそうな。つまり、立派な人の経験談は感銘を与えるだろうが、あんまり参考にはならない。学校を卒業して十数年。クラス会で久

し振りに会った、いまだ独身の旧友が語る奮闘談みたいなものがいい、というわけで、前置きが長くなってしまったが、暇な日曜日の午後、ジントニックを片手に、ふーん、どれ、どれ、と気楽に読んでいただければ光栄の至りである。

いったいどうして曲がりなりにもキャリアの道を、転職を重ね、歩んできたのか。本来は実に平凡な人間である私は、目的意識なるものを持ち、それに向かってまっしぐらというタイプではない。しかしながら、環境――親、学校教育――というものは恐ろしいもので、知らず、知らずのうちに本人を蝕(むしば)んでいる。私の両親は大正デモクラシーの落とし子。自由、平等、博愛、フランスの人権宣言ではないが、彼らの子供教育のモットーは、〃他人に迷惑をかけない限り、何をするのも自由である〃ということに尽きていた。

ともかく、子供である私が、こんなに自由でいいのかネェ——と、ときどき親の顔を疑いのまなざしで見るほど、その信念は徹底していた。しかし、E・H・フロムの「自由からの逃走」ではないが、自由とは不自由なり。その与えられている自由が手枷、足枷となり、何度か親を恨み、ノロッたものである。つまり、親からああしろ、こうしろと、口うるさくいわれるのは確かにうんざりだが、それは選択をし、決定をし、果ては、その結果に責任を持つという、問題によってはゾッとするほど、おっかない事をしないで済むいい口実になる。天才、非凡人ならともかく、大体の人は何をしたいか、どうやるべきか、なんてことは、あんまりはっきりわかっていないのではないか……？　少なくとも、私の場合は、友人が、

「母がね、……しなさいっていうのよ」

とか、

「うーん、父がうるさくてね、しょうがないの。だから決めたのよ」

などというのを聞くたびに、内心、驚愕しつつも、

「ふーん、そんなもん」
とその不自由を羨ましく思ったもんだ。
そのうえ、我が家の家訓には、
「働いた後のご飯が一番おいしい」
「働かざるものは食うべからず」
みたいなものがあって、経済的独立は自立の基本条件であると教えられた。当然、お小遣いなるものも最低限におさえられ、アルバイトをするのは当たり前、自分のことは自分で面倒みろ、といった調子で、——まあ、私は怠け者だけど、好奇心、冒険心は人並み以上。大学時代は家庭教師をしたり、体育会に入っていて、勉強する時間のない仲間に英訳を売ったり、ダンスパーティーを企画して、結構調子よく稼ぎ、なんのかんのいっても現代っ子よろしく楽しみながら、経済的自立とやらの道を割に早くから歩き始めた。
学校生活といえば、私の受けた学校教育は一風変わっていた。女といえども男と同レベルの教育をという両親の方針で入った学校は、小学校から高等学校まで

一クラスに女子生徒がたったの十人前後。質実剛健、スパルタ教育、プラス受験校的授業で生徒を鍛える、私立といえども単なるお坊ちゃん、お嬢ちゃん学校とはいえないものだった。ちなみに遠足といえば、いつも山登り。おやつも百円まで。駅から学校までのバスは使用禁止。泳げない生徒もいきなり、端しか背の立たないプールに入れられる、といった厳しいもの。女の子のメソメソ、なよなよした性格は良くも悪くも矯正（きょうせい）される教育である。

しかしながら、現実は、さらに酷なもの。文化祭とか学園の行事があると、我が同志であるはずの男子生徒は他の女子校に通っている、いわゆる清純可憐な、「女学生の友」みたいな女の子を招待するのだ。フォーク・ダンスが始まると、実に残酷に、男の子の本音が明らかになる。普段、丁丁発止とやりあう、同級のタフな女の子にはお呼びがかからないのだ。そしてなぜか、ダンスは女からは誘ってはおかしいことになっていたので、我らはポカンとそばで見ているはめになる。

学校の勉強は理数、語学に重きがおかれ、成績の悪い生徒は容赦なく留年させられる。女子生徒の場合は、将来の事もあるでしょうからと、他の学校に移るこ

とを半ば強制的に勧められる。

こんな具合に、私はかなり幼きころから、女の子は男の子と同じにやっていては浮かばれない。試験の前の日は男の子並みに勉強しなければならないが、アミカラーを頭に巻き、痛い思いをして寝なくちゃいけない分、女の子のほうがもう一つ大変なのだと、悟らされていた。

M・ヘニッグ、A・ジャーディム著の「マネージニアル・ウーマン」（日本題「キャリア・ウーマン」・税所百合子訳・サイマル出版）には、現在米国の一流企業で社長・副社長のポジションにある女性を調査した結果見出された、彼女達の成功に寄与したと思われる、ユニークな共通点が紹介されている。

そういった一流キャリア・ウーマンと両親との関係、あるいは彼女達が、家庭と学校との矛盾の中でどう成長して、キャリアを選択したかについての調査結果は、私自身の仕事とのかかわりを振り返るのに大変参考になった。

このような素晴らしい女性達と、私を比較するなんて、おそれ多いが、敢えて、共通、非共通点を探ってみたい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

まず両親との関係。私は長子であるが、弟がいるので、決して息子として育てられたのではない。しかし、私の両親は女の子であるから、どうこうしてはいけないということは決して言わなかった。むしろ、「伝統的に女の子に許されている以上の自由」は認められていたし、両親との関係は友達的であった。

また、私が何か冒険的なこと、例えば学生時代に小遣いを貯め、ブラジル行きの移民船でハワイに渡り、夏休みの毎日を一ドル余で過ごすのだ、という突拍子もない計画を立てた時も、一番積極的に応援してくれたのは両親であった。

両親のうちでも、父と私は性格が似ているせいか、父からは確かに「注意力、是非の判断、報償、確認」といったようなこの世の中を支配する競争ゲームに参加するうえで必要な、基本的ルールを事あるごとに私も教わった。

全般的に私と両親の関係は、かなり、この成功している米国女性重役の家族史に酷似していて、彼女らに共通しているとみられる、(1)両親との仲が近い、(2)両親との一体感が強い、(3)両親と、より多くの余暇を過ごす、(4)両親を信頼できる

友人とみなす、(5)親のものの見方をより吸収しやすい、(6)親との関係の基礎として、信頼をあげる傾向がより強い、(7)自立心を持つ事をより促されていると感じる、(8)仲間の評価には、さほど関心を示さない、(9)思考の内面化がより見られ、独立心が強い、(10)探究がより好きで、危険をかえりみない、の点で(3)を除いては私の成長期にはこのような傾向が見られたと思う。

私の父親は政治家であるため、時間的に余暇を家族と過ごすのは限られていた。しかし、量的にはともかく、質的には父との時間は充実していて、私の重要な学習源であった。

人が成長していく過程には、親、兄弟、教師、友人、同僚……さまざまな人間とのいろいろな形の触れ合いがある。そして、その人の個性はそういった数え切れないほどの人とのかかわり合いから生まれる出来事に教えられ、磨かれていく。

袖振り合うも多生の縁。人生で出会う人達とはすべて前世の因縁がある、と断定はしないが、私にはいささか人と人との関係を運命論者的に見る傾向がある。

自分の仕事への姿勢、家庭教育が私に何を与えたか、振り返るうちに、ふと感

じたのだが、私がキャリア・ウーマンとやらになったのは、どうやら宮沢喜一、康子の娘として生まれたという「一つの偶然の巡り合わせ」の結果に過ぎないのかもしれない。

誰でも自分の両親には一種特別な感情を抱き、その子としてこの世に送り出されたことを断然、誇らしく思ったり、絶望を覚えたりするはずだ。ただ、親子の縁とかいうものが、実際、物理的のみならず、精神的にも、すっぱり切れるものなのか知らないが、そういう場合は別にして、一般的には親と子の関係は一番どうこうしにくい関係ではないか。自分が子側になった場合、親側になった場合のいずれでも、選択肢がほかにたくさんあって、そのなかから、「これ」と選んだわけじゃあないから、親子の組み合わせはもう宿命的としか呼びようがない。

親子の出会いはそんなふうに偶然の産物だし、遺伝的にも親となると性格的近似性が少なからずあるのだから、親の影響を子が避けるのは不可能である。

「ああ、いやだ。あんなふうにはなりたくない」

と親を批判した次の瞬間、同じようなことをしている自分を発見することは多

い。

親の押しつける教育、夢みたいな希望もなるたけ聞いたふりをして、我が道を行こうと、ちょっと自分とかがある子なら、意を堅く決心するものだが、これまた、意外な時に、親の望み通り、親に教えられたごとく振る舞ってしまうものだ。

私なんか、そういった点では、まさに絶望的ケースに属する。というのは、先にも書いた通り、私の親は私に、どうこう煩わしくいうての親じゃあなくて、あんまり好きな言葉じゃあないが、いわゆる、放任主義を採用している親である。だから、親が子に与える影響が少ないように思えるかもしれないが、あれこれいわない親の影響は、ひょっとしたら、いちばん強いのではないか。

例えば、自由につきものの責任の意味にしたって、私の両親は厳しく教え込むというやり方はとらずに、冷たくつき放すという方法でくるので、こちら側としても反撃がしづらい。

小学生の低学年のころだったか、ある日、学校から帰っても、宿題をほったらかして遊びほうけていたことがあった。夕食後もお気に入りのテレビ番組を見た

りして、デレデレしていたのだが、ただの一度も、「宿題はいいの」とか、「早く宿題を片づけてから、遊びなさい」とか、親は小言をいわないので、寝る時間が来るまで、宿題のことはすっかり忘れてしまっていた。

翌日の本を揃え始めた時に、

「あっ、いけない。やばい」

と気がついて、大騒ぎで宿題をすることを忘れたといってみたものの、宿題をしないで遊んでたことは叱られない。ただ、ただ、クールに、

「しょうがないじゃない。明日、学校の先生に、忘れて、してきませんでした、といいなさい」

といわれるばかりで、そんなことを先生やみなの前でいうくらいなら、死ぬほうがましだと、しょげかえっている私の気持ちなんか無視である。おそるおそる、

「ねえ、これからやってもいいかしら」

と尋ねても、

「どうぞ。でも私たちもう寝るわよ」

と、多少いらついた声が返ってくるだけだから、自分を責める以外、親に怒鳴り返してスッキリすることもできない。

親のほうも別に、こういったやり方が、子供をしつけるうえで一番効果的だと深く信じてやっているのではないらしいので、実にすべてが自然で、子供としてもああそうですか、と引きさがる以外どうしようもない。

また、その後、高校生になって、太めが気になりだし、今日からはもう甘いものは食べないわ、と家中に宣言した直後に、運悪くケーキをたくさん、お客様からいただいたことがある。

その時も、冷蔵庫を開け、ケーキの箱をチラと見た瞬間から、

「ああ、どうしよう、どうしよう。食べようかな、やっぱり、やめようかな」

と苦しい自己との凄まじい闘いが私を苛めているのなんか、親は察しているのか、いないのか、

「今日は、A軒のお菓子をいただいたわよ。食べる?……ああ、そうそう、もう甘い物はいけないんでしたっけ」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com